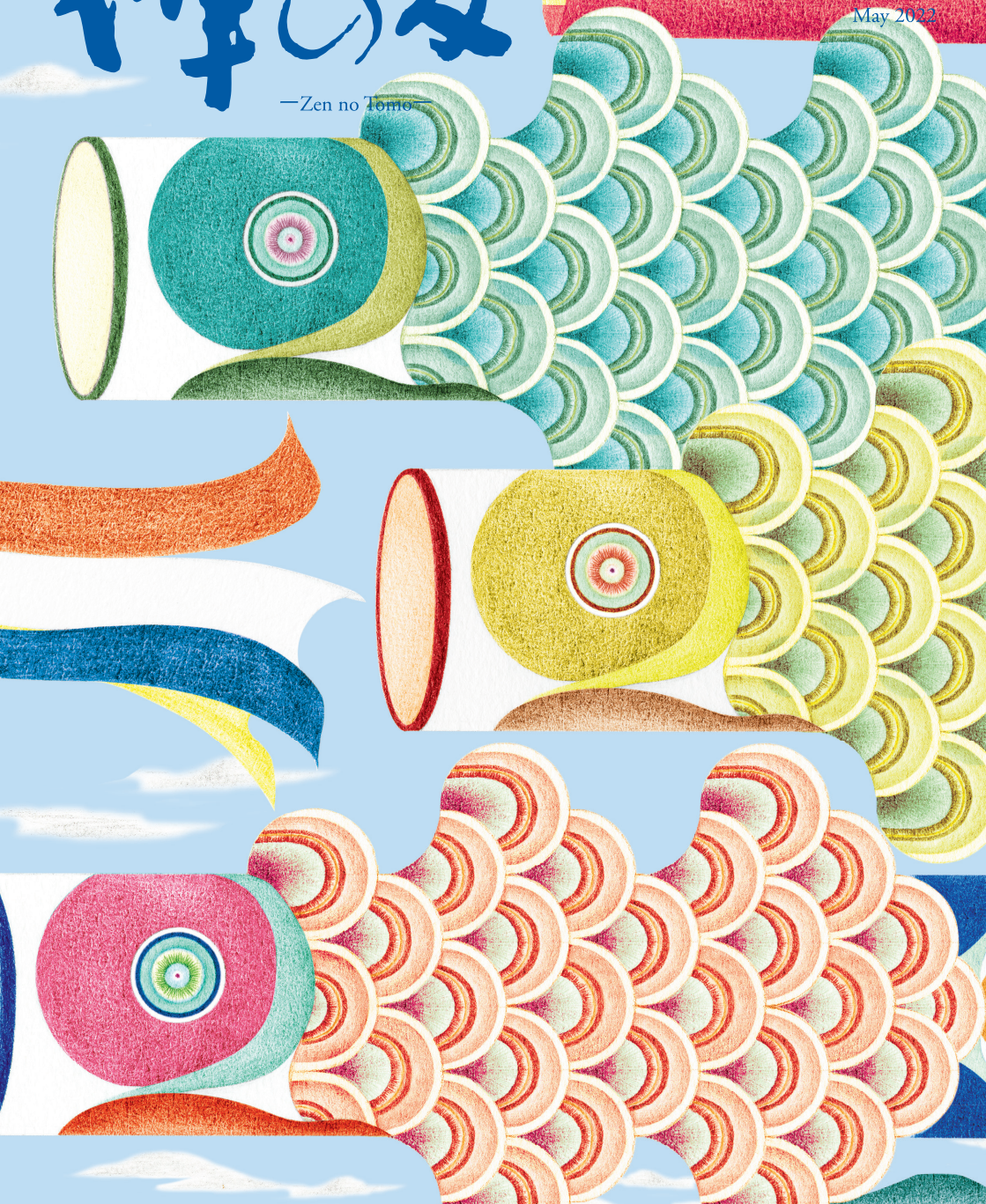


禅の友

—Zen no Tomo—

5

May 2022





ご本山だより 大本山永平寺【乳水和合】

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二



新緑深まる永平寺の五月、「新到掛搭式」という儀式が行われます。雪の中を上山しました新米雲水たちは

「新到掛搭式」を機に永平寺での修行を正式に許され、「新到和尚」としての自覚ある修行が始まります。「掛搭」とは、我々出家者がもつ衣鉢（お袈裟と応量器）を包んだ袋を僧堂のそれぞれ与えられた場所の鉤に掛けることから、道場に留まり修行を行う意味に転じた言葉です。

新到和尚は修行の中心となる僧堂の自位に丁寧（じんねい）に三度礼拝し、その後、禅師さまとの相見の間「光明蔵」で、おのおのが決意を込めて清書した「掛搭状」という誓願書を声高らかに読み上げ、その行為を通して更に意を固めていくのです。上山から既に九二カ月が

過ぎ、当初に比べますと体も引き締まり、顔つきは凛々しく、眼にも涼やかな光が宿るようになっております。

道元禅師さまが告示しの、僧堂での規則や作法・心構えを説いた『重雲堂式』には「堂中の衆は、乳水のごとくに和合して、たがいに道業を一興すべし」という一文が見られます。乳と水とは互いに混ざり合いやすいものであり、その様子はどこからが水でどこかが乳であるかがわかりません。そして乳の白さは透明な水でこそ保つことができます。僧堂においての坐中、背を並べて正身端坐する雲水たちの姿は新米も古参もなく皆まさに等しく仏さまの姿そのものであり、これこそまさに「乳水和合」の姿であると改めて感ずるものです。



ご本山だより

大本山總持寺

くみふう みなみよりきたり
【薫風自南来】

大本山總持寺
☎〇四五・五八一・六〇二二



「薫風自南来」という言葉があります。茶道では本席の掛け軸として床に掛けられます。

總持寺は沢山の樹木に囲まれ、そこを抜け通ってくる風はまさに若葉や青葉の香りを含んだ穏やかな風であって、百間廊下を歩いていると頬にあたる爽やかな風が薫風そのものなのです。

禅はこの言葉の真意をどう捉えるのでしょうか。

私たちは何かという得失にこだわらず、利害にとらわれ、愛憎にかたより、善悪にこだわり、迷悟にとらわれ、凡聖にかたよって、右往左往する毎日です。しかし、それらの対立の一切を一陣の薫風によって吹き払ってしまえば、こだわりもなく、とらわれもなく、かたよりもない、自由自在なサツパリとした清々しい涼味を感じることができると教えるのです。

總持寺では五月十三日から十七日にかけて「五則」という行持が行われます。この五則の儀式は曹洞宗の歴史と伝統を継承していく上では重要なことであり、これを後世に伝えていくことも修行の眼目といえます。

そのクライマックスが十七日に行われます。

「首座法戦式」です。四月からすでに始まっている修行期間「夏安居制中」の一〇〇日間の修行の先頭に立つ、いわばリーダーが首座和尚なのです。その首座和尚が禅師さまの命を受け、二十五名の修行僧と問答を行うのです。

緊張感みなぎる真剣勝負の大問答なのです。五則が終了すると一〇〇日間の修行期間も残すところ半分となり、修行僧たちの表情も一段と引き締まってくるのです。

選・坊城俊樹

天国を見に行くつもり揚雲雀

埼玉県 橋本 永子

評

ほんとうに雲雀というものは天高く舞うことがある。青空の天辺で鳴く声は甲高く響き渡る。もしかしたら雲雀たちは天国を見るつもりであんなに高く舞うのではなからうか。そんな素敵な想像をした作者。雲雀の句はその声を詠うの多いがこれは希有の作品。

気の抜けしやうにしづりて屋根の雪

北海道 大野 節子

評

気の抜けたという擬人化した措辞が面白い。本当は屋根に日が当たりはじめて溶けてずると滑って行く景色なのだろう。もう春になると万物全てが溶け始める。厳しい北海道の冬が春になると、本当に気が抜けるという実感が湧くのだろう。

◆ 組のとなとんとんと春を呼ぶ

秋田県 田村 恵美子

◆ 涅槃雪を頭に被り六地藏

岡山県 有元 克英

◆ 五姉妹の里に集ひて女正月

東京都 松本 キヌエ

◆ 飛行雲青に溶けゆく春の朝

山口県 稲村 みどり

◆ 癸心の心の揺らぐ寒の雨

島根県 俵 保恵

◆ 春耕の土塊に湯気立つ日かな

奈良県 竹村 和成

◆ 春一番小さき妻にまつはりて

宮城県 阿部 徳夫

◆ 青空にあめんぼうみる水溜り

三重県 西村 廣視

◆ 啓蟄やロボット達の働く世

和歌山県 田崎 よし子

◆ 春めくや遠くで枝を揺らす鳥

宮城県 高橋 静子

選者吟

その中に春爛漫の羅漢みて

俊樹

作句小見

これは東京の羅漢寺という所にある五百羅漢の様子である。羅漢たちはそれぞれ皆違う表情をしている。厳しい顔や哀しい顔をしていたりする。その中に一人だけまことにのんびりと満面の笑みを湛えた羅漢が居る。まこと春爛漫の使者かもしれぬ。

選・長澤 ちづ

「翼をください」歌ながれ来て空をみる還るなきわがひとつのつばさ

北海道 菅原 三江子

評 子息を十年前に亡くされた作者と以前の投稿歌で知っている。結句の「ひとつのつばさ」には、その悲傷の思いが託されては居まいか。そうではなくとも喪失した大切なものの喩として詩情のある言葉である。

『雪華図説』生みしふるさと幼よりルーペを持ちて雪を覗きぬ

静岡県 杉原 氏子

評 『北越雪譜』は良く話題になるが同様に作者の故郷に『雪華図説』があるという。下総国藩主土井氏の著作で雪の結晶の観察書。幼い頃より培われた故郷への誇りが籠もる。

◆ 地震無き津波警報にとび起きて寒の灯ともる避難所めざす

岩手県 阿部 照子

◆ 牙の無きアフリカ象を記事で知る密猟避けて生き残るため

山口県 橋本 美知子

◆ コロナ禍は内省の日々開きたる日記を閉じてひと日終りぬ

東京都 長谷川 瞳

◆ 寂しさに徹せんとして海に出て海の白さを心にとどむ

鳥取県 徳本 義則

◆ 土曜の朝踊り子号に乗る老女喪服にリュックお骨を抱きて

静岡県 末光 愛正

◆ わがふるさとグリーンプラネット^い愛してみてもう^いだけは言いて逝きたし

ロンドン バロー 典子

◆ 地蔵さんの前掛け縫うと買いたる布ひろげれば部屋は赤・赤

兵庫県 前田 あつ子

◆ 籤つくり組み立て紙貼り糸引きと得意持ち寄り子らの風揚げ

島根県 横山 豪吾

◆ 朝夕の雪掻く難儀いくたびも息ととのえる米寿の吾は

岩手県 穴戸 さとる

◆ 針供養亡母祖母使ひし裁縫針いぶし銀なる色に光りぬ

宮城県 阿部 澄江

選者詠

ぬいぐるみがプーさんとして動き出す孫が

遊んで帰りしのちは

ちづ

作歌小見

大雪の今冬、雪国の高齢の方々の雪掻きの労働は如何ばかりかと、穴戸さんの作からも伺え心が痛みます。コロナ禍で籠もる日々も長谷川さんのような視点で詠むことも出来、得られぬものを嘆くより今を大切にの精神が伝わってきます。